

## 美事に結実したパイオニア精神

### 大中の湖に定着した転作スイカの栽培

河 見 泰 成

#### 初年度だけの線香花火ではダメ

##### それが定着したかどうか問題

戦争が終った翌年（昭和21年）に、いわゆる“新円”が発行された。止まるところを知らないインフレを克服するのが狙いであった。米のダブつきを解消するために打ち出された“米の生産調整”は、内容と方法はちがうが、その狙いは“新円”発行とよく似ている。

“新円”切替えに伴って、いろいろな問題が発生しように、“米の生産調整”の実施に当たっても、いろいろな問題が提起されたし、事件が起きた。個人的な場合は別として、いちばん象徴的であり、強く印象付けられているのは、あたら巨額の国費を投下して建設途上にあった秋田県の“八郎瀧の干拓事業計画”が、1部入植開始間もなく遂に計画そのものが中止されてしまったことであろう。

ともあれ、賽（さい）は既に投げられた。過去に恋々として下を向いていたのでは、良い考えが浮ぶ筈がない。坂本九ちゃんの歌ではないが、こうなれば“上を向いて歩こう”だ。こういったムードを反映した訳でもあるまいが、近来、スイカ新興産地の進出が目立つようである。琵琶湖最大の内湖であった滋賀県大中の湖の干拓地で生産されるスイカも、その1つである。

八郎瀧の“新農村建設計画”が悲劇的な幕切れを余儀なくされたのは対照的に、大中の湖の新農村では昨年 はじめてスイカの集団転作を手がけながら、最盛期には連日100トンという大量出荷（収量は約2,500トン）をやったのけ、あたかも怒涛のように京阪神市場を席捲してしまった。驚いたのはタメゴロウばかりではない。当時、NHKテレビその他のマスコミがじゃんじゃんとり上げたから、ご存知の方も多からう。

転作が問題になっている折柄だけに、集団的にスイカに転作して成功した事例は、確かに紹介するにふさわしいエピソードであるに違いない。しかし、その成功も初年度だけで、線香花火に終わってしまうのだったら話はそれまで。問題は、それが定着したかどうか、技術の面で、経営の面でなんらかの進展があったのかどうかだ。

大中の湖のスイカ生産農家は、この質問に立派に“イエス”とこたえたのだ。ことしのスイカをこそ、マスコミが取り上げるべきだと筆者は思うのだが……。

昨年は時期を逸したので、“ことしは是非、大中の湖を訪ねてみたい。”という筆者の希望は、存外早くかなえられることになった。

“7月20日頃スイカが初出荷されるそうなので、その頃おいでになりませんか？”と、大阪営業所の大江さんから連絡があった。そこで、さっそく西下、7月21日正午頃、東海道線安土駅で大江さんと、わざわざ同行された大中の湖農協の居松部長にお目にかかった。

#### 広い、広い、本当に広い

##### 大中の湖干拓地のあらまし

国道を左へ折れて車で10分ばかり、右手に見える旧安土城趾の緑を眺めながら、やや暫らく行くと、右に左に水面が現われたりする。この辺が小中（しょうなか）の湖の干拓地なのだそう。そういわれてみると、どうもほかの農業地帯の風景とは、違うような気がする。強いていえば、利根川河口に近い茨城県の神栖や息栖あたりのもようでもあり、そうでないようでもあり、筆者には、それをうまく説明できない。

やがて、眼前に広ぼう390万坪（1,300ha）、周辺延長12.5kmに及ぶといわれる大中の湖の大生産団地が展開した。

広い、広い、本当に広い。しかし、面積の広大さは確かに驚きであったが、筆者は入植後わずか3年にして経営（稲作）を軌道に乗せたという生産農家の苦難と努力と良き指導者の強力な統率力と、更にこれを支える新技術の開発にいそしむ技術陣のたゆまぬ指導などが、しのばれるのだった。

“事務所でお待ちしています。”と、ここで居松部長と別れた筆者らは、そのまま車を駆って、何はともあれ、この大中の湖という大農業生産団地の周囲を視て巡った。

【大中の湖干拓地のあらまし】

大中の湖は40数カ所あった琵琶湖の内湖のうち最大の

もので、昭和21年に緊急食糧計画に基づいて国営事業として計画され、32年度から特定土地改良工事特別会計により総工費32億円を投じて39年6月中旬、湖岸めぐりの湖底が陸化し、引続き7月初旬に湖心部の排水が完了し、ここに大中の湖底が全面的に露呈した。

その後更に42年度完成を目標に、国の基幹工事が実施されるのと併行して、40年には入植者、地元増反者の選考が実施され、41年には一部の入植者によって営農が開始された。

大中の湖の生産現況について、大中の湖農業の田井中副会長は次のように述べている。

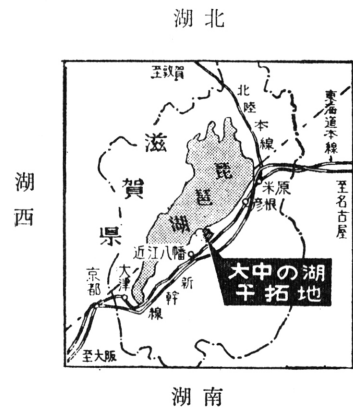
**米+アルファの複合経営へ**

**大中の湖の現況**

“現段階では、稲作の機械化は進められたが、大型機械一貫体系は定着せず、むしろ中型的タイプによる機械化体系が組み立てられ、この中型機械化により省力栽培の方向へ進みつつある。とくに生産調整によってスイカ、キャベツ等を導入したために、よりいっそうの省力栽培方式が必要になってきた。”

“また生産調整を総合的に推進していくためには、組織の問題を考

えなくてはならない。入植当初の協業経営は分解されて、いったん個別経営形態にもどったが、その後さらに部門別の協業組織の共同化に発展した。今後はこの部門別の協



大中の湖の位置

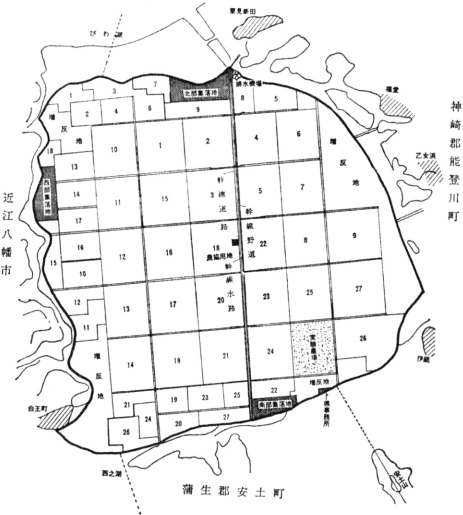
業組織による集団栽培をさらに発展させ、よりいっそうの成果をあげるべく努力せねばならない。”

“もはや1戸当り4haの水稲作を固執する傾向はまったく見られなくなった。労働力のゆるす限り複合部門を拡大し、将来の專業化にそなえた基礎経営を推進する方向へむかっている。米+アルファ部門の農家として、いかに省力化をはかるかが、今後残されている課題である。”

“44年度までの手植方式の移植から一変して、湛水直播水稲栽培方式を希望する農家がふえ、稚苗の機械移植とともに伸びてゆく可能性が大きい。44年度の実績では直播栽培による労働力は、10a当り17時間という驚異的

な省力となった。”

“このように水稲作を省力化することにより、優良奨励品種の統一をはかることが可能となり、44年度は日本



大中の湖新農村の見取図

晴を主体として、キンパと、この2品種の作付統一がなされた。従来はカンントリーエレベーターの稼働計画にもとづいて、極早生から晩生に至る517品種に及ぶ多品種の作付がなされていた。優良品種に統一することは、食味等の米の品質の点からも当然要求されたが、これが可能になったのは、土地基盤整備とともに、機械化省力栽培によるものである。”

“水稲の省力化とともに、水田裏作としての麦作栽培が、また転作によるスイカ作と関連して、ビール麦の栽培面積が増大している。ビール麦は省力粗放栽培により、10a当り8時間以内で、収穫までの作業を終えることが可能である。45年度のスイカ作付農家のほとんどが、ビール麦、飼料麦を播種しており、その作付面積は120haに及んでいる。”

“水稲の省力化が可能になるとともに、複合部門の米+野菜・麦作類型農家が、45年度では173戸、80%以上にもなり、米+肥育牛・麦作類型農家22戸、米+花き園芸農家が5戸、その他複合部門農家13戸となり、米の粗収入以上の所得をあげている事例もある。”(農業技術・7月号“大中の湖における営農と技術”)

**どうして納得させるか**

**説得にはひと苦労した**

総耕地面積1,300ha、周辺12.5kmという大生産団地であるからは、ごく大雑把にみて巡っても優に30分はかかる。車上からとはいえ、充分目の保養をさしてもらったわれわれは、団地の中央部にある大中の湖農業協同組合の会長室で石川勝会長にお目にかかり、転作対象作物に



石川会長さん

スイカを選んだ事情などについて伺った。

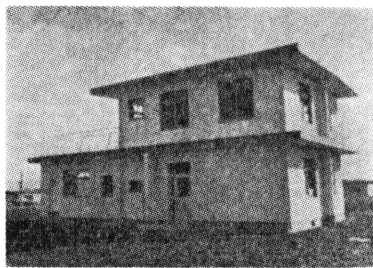
“大型機械化されたわれわれにとって、10%も米の生産を調整せんらんいうことは、誠に容易なことではないのですわ。入植者216戸の肩には、1戸当り約700万円

(土地特別会計377・1万円、住宅公庫資金108万円、住宅信連資金150万円、住宅農協資金50万円)の借入金がかかるとののです。生産調整と借金とを、一体どうしたら調整できるんか、それこそ連日真剣に討議したものでした。”

“食管制度が据置かれる以上、政府の方針に協力するに吝かさではないけど、大中の湖の新農村としては“休耕”は絶対認める訳に行かないという結論になりましたなあ、44年12月25日、知事との最終会談席上で、これを知事に報告し諒承を得たんですわ。”

“休耕はせん、転作はする一が、ではどうしてスイカならスイカの予定耕地を創出するかい問題が出て参ります。ところが妙なもので、スタートは斉一であった筈の入植者も、3年経過すると、それぞれ家庭の事情が違ってくるのですわなあ。経営面にも、生活面にも、家族間の問題についても…。そんな訳で農外就業を希望するものがあると思えば、後継者が全然農業を志望しないために、止むを得ず農業放棄を希望するものが出たり……で、結構、調整を要する段階にきておりましたんですわ。そこで農協が中心になりまして、例の農地の信託制度を実施致しまして、82haというものを、それぞれ希望する農家に配分したのです。”

“そこで1月9日に総会を開きまして、転作対象作物としてスイカを選ぶことにしたんですが、事ここに至るまではなかなか大変でした。何しろ米の生産を本命と心得えとる農家を納得させようというからには、それだけの裏付けが無うてはなりません。幸い当団地内の新農村実験農場で試作したスイカの品質が、非常にすぐれていた



大中の湖の団地内の農家

“そこでさっそく栽培基準設定やら、講習会の開催やらに忙殺されたのですが、栽培技術が容易にスムーズに

この気象の特殊性、水利条件を調整すれば、ここは決してスイカに不向きではないという実績が、物をいうたことになりました。”

浸透せんなど、なかなか案ではなかったのです。それに、団地内に散在しているスイカ栽培予定地(64ha)を3集落にまとめるのに腐心したことなどが、今さらのように憶い出されますわ。昨年は64haで、収量2,500トン、キロ当り30円の収益として7,500万円、こしは面積が90haに増え、収量3,500トンは確実やと思うけど、梅雨どきから7月中旬までの異常気象などから、収益を昨年の30円として、大体1億円というのが、ええ所ではなかろうか?—と思うとります。”

“増築中の第2集・出荷所(200坪)も完成しましたので、その竣工式を兼ねて、あす(22日)午前10時から初出荷することになりました。その前夜祭という訳やないけど、庭に櫓を立てまして今日、あすは盆踊大会やりますわ。”

(さぞ賑やかで愉快だろうとは思ったが、日程がここに逗留を許さないのが残念だったのと、このあと外へ出て2、3枚撮影したトタン、シャッターが下りなくなり、おまけに既にフィルムは感光していたらしく、この団地内でとったフィルム全部無駄になってしまった。こういう事故はこれまでにないことだったが、その点深くお詫び申し上げます。筆者註)

“スイカの生産関係のことは、あっちに専門家(西山さん)がおるので、細かいことはそちらでお聞き願うとして、この際われわれの営農の基本を申上げておきましょう。もとより、国の内外の情勢の変動に対応し得るよう、常に研究開発を惜しんではならんと思うと同時に、米はこの国の主幹生産物として、よし、先きざき食管がはずされればなあおのこ、はずされん場合においてもなおさら、“うまい江州米”としての“大中の湖”のラベルを売込まなあかんのです。また、米が仮に自由化になるような場合においても、われわれはこれに充分対応できるのです。”

“とにも角にも、われわれはパイオニアや。情熱とビジョンを持たなあかん。隣りがやっとなるから、うちもやろか?—こんな風ではとても、この団地で営農する資格はおまへん。”

具体的にいうたら、この農協の組合員たるからには、最低1日1万円以上の収益をあげんようではどもならないのです。米で最低250万円、それにプラスアルファ…。目のこで勘定しても造作(ぞうさ)もないこってすはなあ。”

確かにそのとおり。!

生育にマッチした施肥がええスイカを生むのや

ちょうど西山佐平(蒲生神崎郡農業改良普及所)さんの手があいたというので、別室でいろいろ話を伺った。

“いちばん問題になるのは労力。普通、スイカは10a 30人といわれとるで、1戸平均50a というここの作型(4ha+スイカ)では、どうして稲作を機械省力化し、同時にスイカの栽培を省力化するかいことやな。”

そこで昨年は、直播による収益の低い普通の栽培で実施に踏み切ったんですわ。しかし、何しろ長辺125mという圃場では、管理作業はもちろん、収穫物の搬出労力も問題だで、4畦ごとに2mの通路を設けたり、雑草は除草剤を使用したほか、病虫害防除、施肥の改善(元肥にCDU化成を施用)、人工授精(蜜蜂による)などに留意しました。”

“驚いたのは野鼠の食害。何を食いよるかって? 種子、スイカの種子よ。お蔭で鼠はマルマル肥えとったわ。そこで播き直し、湿害による根ぐされ、ここ特有の風によるキャップの破損、ツルの被害、土壌内の成育差、できすぎなどということが、176戸の生産農家の間で、毎日のように起きたのには参ったですわ”

“困ったのは梅雨期の水害、とくに6月15日から17日にかけて降り続いた雨で、大部分のスイカ圃場が浸水、うち3haは24時間にわたって冠水する有様やった。そこで皆んな総出で排水作業をやったが、一時は大さわぎになった。(但し、この場合、高畦作りのスイカはほとんど被害が見られなかったが、低畦の方はダメになったそうである。筆者註)”

“ほかに悩まされたのは、スイカのツルボケが続発したこと。が、この水害が、ツルボケ予防方法解明(ダコニールによる抑制)の端緒を与えてくれる結果になり、それが昨年の収穫につながった訳で、いわば不幸中の幸いでもあったわなあ。”

現在、大中の湖のスイカ栽培は、次のような施肥基準で進められている。

① トンネル栽培施肥設計 (kg)

肥 料	総 量	元 肥		追 肥	
		春 期	冬 期	花 肥	玉 肥
堆 厩 肥	1,000	1,000			
苦 土 石 灰	160	160			
BMようりん	100	100			
CDUS555	30		30		
磷硝安加里 604	10		10		
油 粕	100			50	50
NK化成 525	50			20	30
硫 酸 加 里	10				10

成 分 N18.6 P29.0 K15.7

備考 \* 堆厩肥と苦土石灰は12月中, BMようりんは2月まで

\*\* 成育中期の状況で液肥, 第2回玉肥は生育により施肥

② 普通栽培の施肥設計 (kg)

肥 料	総 量	元 肥		追 肥		
		冬 期	春 期	追 肥	玉肥①	玉肥②
堆 厩 肥	1,000	1,000				
苦 土 石 灰	160	160				
BMようりん	100	100				
CDUS555	30		30			
磷硝安加里 604	10		10			
油 粕	100			50	50	
NK化成 525	65			20	30	15
硫 酸 加 里	10				10	

成分 N20.90 P29.3 K22.05

備考 \* 堆厩肥, 苦土石灰, BMようりんは1月中まで  
\*\* CDU555と磷硝安加里604は3月20日までに施用  
\*\*\* NK化成525, 玉肥②は, 成育により施用

なお、スイカと肥料との関係について、西山さんは次のように語った。

“スイカは魚粕だとか油粕などで作ったものが、果肉の色も味もよく、化学肥料で作ったものは悪いものがでけるというようにいわれとるが、試験のデータは必ずしもそうではのうて、硫安でさえ、油粕と変らんものがでけたような成績もある。スイカは短期間に成長して10a当り6トン内外の収穫をあげるのて、多量の肥料を必要とする一方、肥効が緩徐で、しかもスイカの成育に対応して施肥量を増し、肥効が順調に現われたときに、いちばんええものがでけるのや。つまり、肥効の現われ方が、スイカの品質や収量を決定するいうても差支えないやろ、こう思うとります。”

西山さんのレクチュアも済んで、夕なずむ外へ出た。組立て中の櫓はもうすっかりでき上がっていた。

その附近から第1集・出荷場、それに新築なって明日の初出荷を待つ第2集・出荷場あたりにかけては、集・出荷作業に動員された滋賀大学などの学生諸君がほぼ60名、あすの準備に忙殺されていた。

1玉5kgとして150トンを毎日出荷するとあるから、個数にして実に3万個。これを学生諸君は毎日繰り返す訳だから、何としても大変なことだ。

あとがき ますますお元気のことと存じます。もどり梅雨といわれた、うとうしきもどこへやら、7月下旬からよく晴れた日が続き、東北の稲作などもだいぶ回復したのではないのでしょうか。

8月号をお送りします。編集の都合で一部をあとに延ばしたものもありますが、この点はどうかご諒承下さい。

なお、9月号は特集号(主として米についての問題を扱っています)です。ご期待下さい。(K生)